

昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可  
 昭和五十二年九月十五日 發行(毎月一回・十五日發行)

(通第三三九号)

# 慈光

第二十九卷

第九号

## 次

信仰談話会 応答抄録……………近角常観……………(1)

① 大経結びの段について……………福島政雄……………(6)

② 実験の信仰……………菅瀬芳英……………(11)

父と子に送る……………积可説居士……………(15)

## 目

念仏詩抄……………木村無相……………(17)

愚禿悲歎述懐和讃……………花田正夫……………(20)

信仰談話会 応答抄録

近 角 常 観

第二席

某甲氏（多年聞法に心懸けられた横浜の一老人）

私は多年お聞かせに預りますがどうも重荷をおろした様な心持ちになられませぬ。

○あなたのお尋ねは、そうではないでしょうけれども、従来多くお説教を聴聞せられた方は、往々「お慈悲はただである」とか「このままながらのお助けと喜んで居ります」とか、消極的のみを言うて安心して居る言い方がある。

あなたのも、もしそれであるなら私の言う事が聞かれぬ、私の念を押すのは、どうかして御慈悲を徹せしめたいからである。よく人が、あなたの言うように、永々聴聞するが重荷がおりた心になれぬとかどうしても得られぬで困るとか訴えられるのであるが、それが本当に光明を認めたいと云うのならよいが、大低な処までは分つて居るが、もう一部だけ解らぬと言うような所にとどまって、今が今、

某甲氏。今までの持物が皆からになりました。

○あなたの一言から言えば、多年あなたが仏法々々と言うて居られたのも、仏をおもちゃにし、人をたばかっていたのでありませぬか。今まで多年喜んで居つた事は、あなたを庄しつゝ荷物となつていたのでないか、それは私もその経験があればこそ申すのである。

この間も或る方が尋ねて来られた。私は其人に対して、今まであなたが筆に書き、口に述べられたところは、いよいよ今日となると作りものとなるじゃないかと申したところ、本当にその通りであると申されました。

某甲氏。私は全く自分を欺いて居りました。

○今日まではただ人によく思われたいと云うことのみである。ここまで言うて今迄のものが皆消えてしまふ。所が今その本当でないものを活かして置いてはならぬ、自分は如何にもして見ようのない者だと、唯それだけに止まって居つては次の処へ移れぬ。そうすればあなたは全くまことのない者でありましょう。すると今後聴聞しようとも、何をしようとも明るなる筈がないであります。

これも念のために申しますが、聴聞に念をいれるということはいが、我々は間違わぬように聞かねばならぬと云うてばかり居る人がある。これは聴聞ばかりに頭をつっこんで居る人で、それではなかなか信が得にくい。

して見ようがないというのではなく、ただ口先きだけでこの様に述べられる事が多い。あなたのも若しやそれではありませぬか。

某甲氏、私はこの少しの感じもない者を、可愛想というて下さるとはありがたいと在じては居りますが、

○もう仏様がある以上は、それで十分ではありませんかそれがなおも不審とはどういうことですか。

某甲氏。……………

○貴方は此方から如来に向かつて居る態度である、かかる者をお見捨てなしと我が心できめて居られるだけで、本當の親様がどう云うて居られるかがまだ届いておらぬ。こちらからかれこれ思うのは皆作りものではありませんか。

某甲氏。仰せの通りでございます。

○そうすると、そこで切らねばならぬ。あなたのとをつけるのが誤りである。あなたとしては、そう云われると仕方がないというだけのがこるではありませんか。

あなたもこれからどれほど十分に聴かれても、うそのものはいつまでもうそで駄目である。そうするとどうか。それ程の誠でない偽りばかりの私共と気がついて見れば、もう自分としては何ともして見ようがない。

しかるに、もしやもし、その誠ならぬ者を見捨てられぬという人があつたらどうか。あなたは今までそういう誠ある人の事を聞いて居られたか。あなたの誠になれぬ事を見抜いて、その誠になれぬものが見捨てられぬという人があつたらどうか。分りませんか。そういう人に対して矢張り私は誠になれませぬと言えるかどうか。その誠でないところが見捨てられぬというおまことが今彼方の方から向うて下さるのであります。どうですか。もしまだ受取られぬなら、その受取られぬ処をご遠慮なく申して下さい。

某甲氏。そこまでは解かりますが、しかしどうしても此方から仏に向うようになりません。どうかして本當のものになりたいたいと思ひます。

○ほんものになりたいたいと云うが間違ひなり。偽物はあくまで偽物でほつて置きなさい。その偽物をもつて得意になつて居るようなまことならぬもの、それは仏がちゃんと御存じである。あなたは偽せものだからほんまものにしたいたいと思うだろう。あなたは如来様はかかる者を、という時は頭を下げることと思ひであらう。そういうことを仏様はい

かぬと仰言るのでない。もし双向かえば双向かう者をあわれと見て下されたらどうします。

某甲氏。それでは向い心も何もいらぬのでありますか。

○あなたは消極ばかり云うが、いらぬか、いるかくらいのことではない、借金を棒引きにしてやろうと云われたとき、それなら借金はせんでもよろしいか、では力が弱い。まあこれ程のものをその様にまで親切に言うて下さるかとの思いでなくてはならぬ。

某甲氏。私は矢張り双向かってばかり居ります。

○双向って居ただけ悪かったと云うことになるじやありませんか。

某甲氏。私は手が打てるものじゃと計り思うて居りました。

○それは打てる。大いに打てる。あなたはどうしても消極ばかり云われる。もうこちらは手が打てぬのじゃ、打ていでもよいのじゃという従来の心持にかえられる。大いに手が打てると云うてよろしいのである。

某甲氏。どうも自分のものになりませぬ。…そうして、そのなれぬということをお承知の上と云うことも矢張り自分の心で作っているようであります。

○まあもう少しよくお聞きなさい。(かくて婦人席の某老女にむかい)お婆さん、この頃はどうかですか。

老女。お蔭でありがとうございます。

○あなたの御心持を云うて御覧。

老女。どうにもこうにもならぬ、今死ぬるとなると恐ろしくてたまらず、何辺聞かして貰うても少しも明るくなりませんでした。然るにこのどうにもこうにもならぬところが可愛相との仰せがしみじみこたえまして、有難く喜ばせて貰います。今日も前の心が出て参りますが、思い出させて貰うては楽にして頂いて居ります。

○どこで安心が出来ましたか。

老女。願力の不思議という事が有難く思われます。

○御不思議とはどういうことですか。

老女。見捨て給わぬというがどうも何とも申されませぬ。

○なにが御不思議ですか。

老女。このまま助けてやると云う仰せが、ただ不思議でなりません。今までまだ何かあると思うておりましたに、ただこのままという処が如何にもお不思議と頂いております。

○今まで苦しんで居られた方が安心しておられるのを見れば頂かれたのでありましようが、誰でも不思議ということ聞いて居っても夜が明けぬ、只口先きだけではいけません。極々、大切なところであります。

○御不思議に夜が明けぬ前には、反対に考える処が一つある。即ち有難く受けられたらと考える。しかしそれはどうしても受けられぬ。お慈悲の方では有難く受けられぬものが、一入可愛相なのである。(更に先きの老人に向われ)あなたの胸に有難くなるのだと思うて居らるるが、それは出てこぬ。又出て来ぬからいかぬと心配される。私共は元来、親に背きて逃げようとはかりして居る。それを親の方では、親を捨てて逃げる者が一層可愛相というのである。

某甲氏。それは承知して居ります。

○それは承知して居りますとは、向う様の御好意に対して大いに背く。併し私はそれをいかぬと云うのではない、無理からぬ事であると思う。仏様はあなたのその性分までをご存じで、遣瀨なく仰せ下さるのであります。

あの御老女が、先きほど、今迄は喜びたいと思つてばかり居たに、このままなりのお助けとはさても不思議やと頂いたといわれた。喜びたい／＼では何時までもお慈悲が聞こえぬ。その喜ぶことの出来ぬ私を可愛相じゃと仰せ下さる如来のお慈悲は私の悪いだけ深きなり。私は悪いばかり、それをあくまでお見捨て下さらぬがお慈悲である。

○(一同に向われ)この御老人は毎日横浜からわざわざ御来聴になる方で、かの越前の柴田氏とお知り合いで、多

年某高僧について法を聞かれたのであるけれども、どうにも消極一偏におちて積極のお慈悲が現れて下されぬ。この御老人に対して甚だはげしく申上げて失礼とは存じますがこの方のような不審を持つておいでの方も多くありますから殊に力強く申したのであります。

某甲氏、段々のお聞かせにあずかり。私がどうもこうもして見ようのないことがわかりました。

○矢張りあなたが結局もとの処へお帰りになる。そうして見ればもう結局あなたは駄目じやありませんか。今死ぬるといふその時は、どう思うもするもないではありませぬか。あなたのその点がいかに可愛相じやとお見捨て下さらぬ御真実が如来様であります。

某甲氏。わかりました。

○あなたは解ろうとするからいかぬ。何も考える余地がないではないか。

某甲氏。私も多年信仰に心掛けて居りながら、聞いても聞いても解らず、さればとて止めることもならず、これが私の有様であります。ただ常にどうかもう少し進みたいと思つております。

○今日の講話に二河白道の事を申しましたが、所謂、行くも死せん、帰るも亦死せん、とは今のあなたの境遇のままを仰せられたのではありませんか。そこで聞くべきは西

岸上の喚び声である。「汝一心正念にして直ちに來れ、我よく汝を護らん」汝とは、その境遇をじかに押えての御言葉、直ちに來れだから自分でどうするでもこうするでもない。如來はよく見抜いて見捨てられぬというのが一心正念のお喚び声である。

あなたが今度遠国からお出でになり、今この席に臨んで進むも退くもならぬという心の中を、無理からぬ事と思し召して、そこを可愛相じやと見て下さるお慈悲である。出來ぬところが可愛想と云うて下さることが有難いではありませんか。なぜそれで気がすみませぬか。

某乙氏。あわれみだけではどうも満足が出來ませぬ。私はもっと悪いということが知れたら頂かれようと思ひます。

○そのように自分の考えをたてとおそうとするところが間違ひである。横浜の老人は道樂で困るとなげかれ、あなたは、又もつと道樂したら親のお慈悲が解ろうと思つて居られる。御老人、いかがですか、有難いじやありませんか。

某甲氏。いや何とも不足の申しようがありません。

○不足の申しようがないのなんと云うぐらいじやない。よくもこれ程の者をお見捨て下さらぬが有難いのである。

某甲氏。今日まで親様の罰があたらないできたのは不思議であります。

## 大経 結びの段について

### 照徹のおもむき

釈尊が五惡段をお説きになります時はズッと彌勒(みろく)菩薩を相手にしておられますが、ここでまたあらためて阿難に向つて仰言り、阿難尊者がお聞きする、こういう事に変更して来ておられます。彌勒菩薩はこれから先に生れて來る何億、何十億、何百億という衆生の代表者であるといふところで五惡段をお聞きになつて居るのであります。阿難尊者はもとこの大無量壽經の釈尊のお話を直接に伺つていた者でありまして、この阿難に向つて改めて

「お前はここでちゃんと着物をととのえて合掌して無量壽仏を拜め、無量壽仏がそこに現れておいでになる」と仰言るのであります。そこで尊者は立つて着物をととのえ、西方をむいて合掌し、敬つて体を地に投げて拜むのであります。その時、無量壽仏がすぐに眼の前に現われて下さり、大光明を放つて一切の諸の世界をお照らしになる。ズッと種々の山の姿が皆同じ一つの色に輝いて見える。丁

はない。

某甲氏。心配するのは無駄でありました。

○それ位じやない。

某甲氏。先生の仰せは分つて居る。そうしてそうでならぬと思つてはおりますも、どうもそこが。

○矢張り同じ事を繰り返して居られるにすぎぬ。あなたは分つて居るといへど、実は少しも解つて居ない。それ故こちらの云うことが届かない。

名倉氏。側で承つて居れば、老人は自ら偽筆のものを所持しながら、それを偽筆と思わず、真筆を示されても、それと見くらべて居られる様に思われます。

○四国の丸尾某氏のごときも、自分が悪いという処まで気はついて居りながら、悪い悪いをくりかえして、それを見捨てぬ親様のお慈悲を喜ぶことが出來なかつた。どうしても仏教には消極と積極との二面があつて、ただ積極一辺の教と趣きを異にして居る。はじめから敵を愛せよと云うても、我々の消極の悪い心が外面にはあらわれぬにしても心はなかなかそうなつてこない。然るにこの悪しき心を飽くまでお見捨て下さらぬことの有難やと頂くときには、たとい人が五分五分で向うて來ても、これを悪く思わぬのみならず、万が一、無理を云うとも、それはもつとものことであると信の上から、憐みの心をさえ生ずるようになるのであります。(求道十一卷、第五号。大正三年八月發行)

### 福島 政雄

度世界全体が水浸しになる時、ただ水ばかりという風に見えるように、この無量壽仏のお光明の中に一切のものが皆包まれてしまつて、声聞だ縁覺だと云つて居るそれらの小さな光というものが、無量壽仏の大きな光に覆ひ包まれてしまつて居る、そして仏様の光明が突に明るく、その中に色々のものが見えて來るのであります。

その光の中に見えて來るものの中に私共に問題となりますのは、その中に色々の衆生が現われて見えますが、その衆生の中に胎生のもので化生のものである。そういう問題であります。胎内から生れるというのと、化生で不思議にポーツと生れてくる、その二種類の衆生がある、それが解かるかと釈尊が仰言るのであります。

すると、胎生と化生のものが見えますが、どうして二種類のものがあるのをごさいますかとお尋ねしますと、その胎生というのは、まだ本當に仏様のまことを確かに身に付けていない、何処か少し疑惑の心を持っていて、やっぱり

自分の功德と思うものと修めて浄土へ生れたいと思ってい  
る、そういう人々が胎生である。次に化生というのには仏の  
まことをすなおに我が身に受けて、自然に何の無理もなく  
何時生れたかわからぬという様にして仏の国に生れている  
それが化生である、と仰言るのであります。

その胎生・化生という事についてまた私の事を少し申し  
上げて見たいと思えます。胎生というお言葉を聞きますと  
私はこういう感じをおこしますのであります。丁度子供が  
母親の胎内に居る、そういう心持でありますまいか。温い  
中に包まれていて気持はいい、然し何となく光は受けてる  
様であるけれども、ぢかに光を身に受けているという感じ  
はない。だから何となく自分の命がこもっているという心  
持であります。何にこもっているかと申せば、今釈尊が仰  
言ったように、自分はこんないい事をやって仏の国に生れ  
るんだ、往生のためには、こういういい事もしなければな  
らぬ、ああいういいことも云わねばならぬと云う様なこと  
で、自分のいい事というもので、いい事と思っているもの  
で自分の命のまわりをめぐるして、自分というものを包み  
隠しております。で歎異抄などに疑城と云いますがこれが  
同じ事でありませう。疑い、やっぱり自分の何かいい事を積  
んで行かなければ仏のお浄土に生れられないのじやなかろ  
うかという、それが何と云いますか、自分の心のまわり、

あたりを行ったり来たりしている状態であります。さて、  
二十の願に徹したという事になりますと、私共はわが身の  
上にじきじきに仏の光を受けている。仏のまことが自分の  
心に届いているという事を自覚している、という様な所が  
二十の願を身に受けている心持であると思えますが、これ  
について白杵祖山先生から承った事があります。それは、  
十九の願から二十の願を通して、それから十八の願に落ち  
つくと云うんだけれども、その状態は、十八願に腰を据え  
てしまった、これで何も彼も解決してしまつたという事  
はならぬのである。十八願の世界に心が開けてくると、十  
九の願、二十の願の世界に迷う自分の姿がはっきり見えて  
来る、と云うことをお聞きしましたが、これはどうであり  
ましょう。そういたしますと、胎生とか化生というものを  
両方分かれた別々の全く趣の違つたものという風に一応云  
つてありますが、併し胎生を通過しての化生でありませう。  
そこに胎生を通過しての化生でありますと共に、今度は化生  
すれば胎生というもの、胎生である自分の姿が見えてく  
る。胎生である間は胎生である自分の姿というものは実は  
見えないのであります。もがいてはいるか、いい気ではいるか、  
そんなことなのであります。自分の姿というものは見え  
ない。それから化生という事に心が開けてまいりますと、  
胎生という自分の姿がはっきり見えてくる。そういう点が

命のまわりに隔ての垣を作っているわけでありませう。まあ  
お城の中に閉じ籠っているか、胎内に閉じ籠っているかと  
そういう隔ての垣の様なものを自分のまわりにめぐらし  
て、そのために光を受けている様だけれどもどうやらと、  
こういう心持。これは一方から申しますと、私共が信仰を  
自分は得たかしらん、自分の心は開けた様にもある、開け  
んようにもあるがという様なことで苦しんでいる。こう云  
う状態にも当りませうと思ふのであります。自分は開け  
たようにも思うけれども、どうもじかにまだ光を受けてる  
様な気がしない、つまり何か隔ての垣をめぐらしている、  
仏のまことをじきじきにわが身の上に受けていないとい  
うようなところでありませうと思ひます。胎生というのは  
そういう事ではなからうか、実際そういう事なら私共も経  
験のあることでありまして、自分は余程心が變つてきた様  
に思うんだけれど、まだ何処か通らん所があるという様な  
心持が続いている限り、それは疑城胎宮であります。氣持  
は悲しくない、何か自分でいい事でも出来る様に思つては  
居りますし、氣持は悪くないという面もあります。それか  
らこれじゃ信心とは云えないだろうという一種の苦しみも  
あるという様なところであります。

これはどうでしょう。例の三願転入と申しますと、やっ  
ぱり十九の願(修諸功德)二十の願(植諸徳本)という

ら釈尊は、胎生のものが五百歳ばかりを経て、その間は常  
に仏を見奉らず、教法を聞かずという様な事を仰言ってい  
ますが、五百歳という様なところにある意味があります。

胎生を通過して化生、胎生と化生と全く別れ別れの衆生に  
なつてしまふのじゃなくて、胎生のものは必ず化生に生れ  
徹する、胎生のものを化生にまで徹せしめずにはおかない  
というのが仏のまことである。そのおまことが胎生の境地  
にある自分に徹つてきて目がさめると、化生の身となる  
と同時に、胎生の自分の姿というものが見えてくるのであり  
ます。私自身の事を考えてもそういうことが云えますかと  
思いますのであります。

これは前に申上げるべきことでしたが、一体ここで無量  
寿仏が出現されて、ポーッと世界を照されるといふのは、  
どういふところを仰つて言っているのでありませうか。これ  
は阿難尊者という方は御承知の通りなかなか悟りが開けな  
かつた方でありませう。釈尊のお弟子の内智の勝つた方、  
情の勝つた方、意志の勝つた人と別けますと、阿難尊者は  
情の人でありました。それだけになかなか情深い所があり  
ます替りに、なかなか仏のお悟りに徹し得なかつた。それ  
で釈尊が御入滅という時には阿難尊者は非常に泣き悲しん  
だという事で、他の悟りの開けた御弟子からたしなめられ

ました。そのあとで金剛子とかいう方の言葉を聞いて始めて心が開けたと伝えられます。情の勝った人は一方にいい所があると同時に、悟りに徹するには骨が折れるのであります。

その阿難尊者の前に、今無量寿仏が出現なさる、そしてそれを拝めと釈尊が仰言る、その阿難尊者の前に無量寿仏が大光明を放って一切の世界を光に包んでお出ましになった。そのところはとうとう問題だろうと思おうのであります、これはやっぱり始めて阿難尊者の心に仏の大光明が射しはじめた、浄土真宗においては「廻心（えしん）」ということただ一度あるべし」と歎異抄にあります、その所の趣きをこの様にあらわされたのであります。実はこれは阿難尊者の事ではなく、私で申せば、私の事なのであります。私なんかの様に煩惱の熾んな、断ち難い様な者に、最初に大光明を開かれる、その所である、つまり胎生である者がその卵の殻からパッと生れる、その趣きをこの様な表現で釈尊が仰言っている。私共はめいめい実は大經の会座のはるか末席に居るわけであり、もともと私なんかも大經の会座に居ると始終考えて居るんではありませんが、実はやっぱりはるか末席に座っているのであります。そして尊者が大光明に接して拜まれているところ、私なら私の心に仏のまことが届いて、私の心が開けはじめ

る、そして自分でつないで居ながら不自由な中で不自由な生活者続けているのであります。そのところを釈尊が自覚させて下さる。胎生という言葉で一方私共の自覚を促し給うと同時に、これは「繫ぐに金鎖を以てし」という様な事で私共の自覚を促して、実際自分で自分を黄金の鎖でつないでいる様なものである。自分で自分の身の廻りに隔ての垣を作っている様なものである。そこがわからんのかと仰言るのであります。わからん、実際自分をつなぎながら、自分で隔てを作りながら、そこはわかっているのではありません。それがわかるというのは、いよいよ仏のお慈悲が身に徹して、底の底までしみこんで、ああ自分は、なるほど自分は自分で黄金の鎖でつないでいる様なものだ、自分が身の廻りに隔ての垣を廻らして胎生の姿に自分をしていのだというそこが見えてくる時には、化生しているわけであり、あります。

自然と、仏のお慈悲の光の中に、何時の間にやら生れ出ている、その所なのであります、非常に面白いと云っては悪いかも知れませんが、味わいの深いところでありまして、胎生・化生・金鎖という様な問題は私共の現実の生活の有様をそういう譬で云いあらわしてあります。そして大事なことは、自分はどう信心を得てしまったぞと、これで解決したぞと云う事で腰を落ち付けてしまわれんも

る、そのところをこのように現わされてありまして、尊者は私の代表であると云ってもよいことになりました。それからもう一つ、ここで問題でありますのは、黄金の鎖をもって繋がれている、あそこであり、これは釈尊が譬で仰言るのであります、立派な宮中に住しながら黄金の鎖で繋がれている、いい食べ物も豊富に与えられていても満足ではあるまい、いくら黄金でも鎖で縛られていては非常に不自由ですから、その鎖を断ち切っても自由の身になりたいと思うだろう。この黄金の鎖とは、我々が自分はこの立派な行いをしていられるぞという事で自分が得意になっていられる有様である。この様に胎生の者は、一方から言えば黄金の鎖で繋がれていて結構な様だが、どうも不自由である。鎖が鉄でなく黄金だからいと云う様なものじゃない。

ところが私共は自分を知らない内に黄金の鎖でつないでいる、つまり自分が自分をつないでいて、なかなか自由の身になれず、無得自在になかなか行けないのであります。自分は駄目なものだとよく云いますが、駄目なものも奥底にそれでも自分はこんな取り柄はあるという思いが必ずひそんでいるのであります。それは黄金の鎖なのであります。どこかで自分が無意識の内にも自分自身を黄金の鎖でつないで無自覚でいるものであります。自分で繫いでい

のが私共にあるという事であり、あります。

それで釈尊は阿難尊者に向って「胎生の者があるということを見よ、しかしながらそれが五百歳である」と五百歳たったらと仰言っているのは、ある期間、ときがかかるかも知れないけれども、必ず自分は胎生であった、金鎖でつなげていた、自分で自分をつないでいたという事に必ず目を覚めさせられるのであるぞと、そして目を覚めさせられると、始めて自分が繋がれている黄金の鎖が見えて来る、自分が廻らしているところの垣が見えてくる、こういうところを仰言っているのだからと私には受け取れますのであります。

## 藤の花

福島農婦

ふくよかに 陽に照らさるる藤の花

苦しみに堪えて出づれば 藤の花

明かし暮らすこの世は暗か 慈悲たのむ

今日ありて明日なき命か 春の風

匂いなきわが身となりぬ 柿の花

義妹の夫の亡くなられしを悼みて

南天の花ほろほると 君逝きましぬ

# 実 験 の 信

# 仰

菅 瀬 芳 英

(註) 福間久米吉氏は明治の十年前に広島県に生れ、資源に乏しい日本の発展は外国貿易による外はないと着眼し、実業家として成功されると共に、両親によく尽くされた人であるが、明治三十九年十月に下顎に癌腫が発生し、四十年二月から八回の手術後、四十一年三月に五十歳の働き盛りで念仏往生された、この病中「菅瀬師、近角師、村上師、前田師、上杉師の導きをうけ信心の眼を開かせて頂き病氣は私の恩人でありませう」と感謝せられるようになった。以下菅瀬師の筆によって導きをいただきたいと思う。

病床に反側転々している福間氏は、多くの人の死を聞き或は親友の死に遇い、或は自分の激烈な苦悶につれて、種々の感想が起り「このように疼痛がはげしくては、到底身の置き所が無い」と訴えられるかと思えば、また「これ位に苦痛にたえ忍んで療養を怠らないから、再び健康に復して、自身の職能を全うすることが出来よう」と希望をおこ

を予想せしめ、八月二十二日、第五回の手術を受けらるる際には、自身の死亡通知文と遺書も作られるに及び、実に寂寥の極み、悲哀の限りであったろう。

しかし、氏が極善最上の殿堂に趣かるる第一の扉はこの時に開かれ、右手に必ず滅すべき生を捨て、左手に無量寿の生を取り、広大会の賑わしさに歓喜する、迷悟の追分に立たれたのであった。

四十年の十月十二日、氏は第六回の手術後、局部の疼痛絶頂に達して、心身の苦悶やるかたなく、生きながら地獄の苦患を受けているように感ぜられ、不平不満のあまりに令息の甲松君を罵って

「汝のすることは偽孝である。己れの許可も得ないで、勝手に医者と相談して、余計な手術をした。貴様達はよってたかって己れを苦しめるのではないか」と責められるような有様であった。

……これまで粉骨碎身して病床に侍して、名医に相談し、難治と知っては名師を招いて教えを勧めるなど、努力の限りをせられた令息の甲松君は、第六回の手術もその効なく、父の身をもたえ、心をなやまして反側転々する様を見ては、慰安の途もつき、希望の光も消え失せて、神をのろい、仏をもうらむにいたった。

すなど、弱り果てた氏の心には悲喜の陰翳が常でなかったはてもない不安の大海原に希望の蜃気楼を追うて漂泊していた氏は、苦痛、煩悶、友の死の波にもてあそばされて、遂に自身の死という暗礁に触れたのである。

氏はこれを次のように書いて示された。

…患部に加刀、切開に及ぶこと数度、その苦痛、不安、不快なること、筆紙の尽くし得べきに非ず。食する物に味を知らず、飲む水に濁き医するを得ず、口舌は破れて言語を発する能わず。社会より離脱して病床のみに籠居し、生の職責を尽すこと不可能なる諸点より考うれば、余の生は不平の生なりと云わざるべからず。

ただ、朝に夕に勇を鼓し、気を壮にし、もって回春、復健の光榮に達せんと、自祈、自衛をこれ事とするのみ。もし不幸にしてこの祈念も到達せざるものならば、実に余が生もはかなきものならずや云々。

と。この生もおそい来る病魔は遂に氏をして、生の覆没

自分はこれまで孝道をつくしている、身心を捧げて療養を尽している、神仏にかくまで祈っているではないか。ああ、それなのに、なぜ孝道のしるしは無いか、療養の甲斐がないか、神仏の御嘉納がないか。もし神であったら受納遊ばされる筈である、もし仏であったら照覧しますであらう。神もない、仏もない、孝道も役に立たぬ、何も彼も駄目である！と。罵る父の面前で手にしていた珠数を寸断せられた。そして絶望の涙にしばらくは身も漂うばかりであった。

床上に音をたてて散った断珠の響は、甲松君がすべてを破壊し去られたひびきであった。君が絶望の歎息であった。君が墜落した暗黒の扉の音であった。

この時、フト君がかって読んでいた歎異鈔の五章が夢のように君の胸に浮んだ。

「親鸞は父母孝養のためとて、一遍にても念仏申したることいまだそうらわず……」

そして、一道の光明が燦(さん)として君の胸底を射た。人力は有限である、自力には限界がある。それで行く所まで行き、考える所まで考えると行き詰って、絶対絶命の破目におちるのである、そうなると無限絶対の弥陀の本願以外に救いはなくなるのである。幸に甲松君は歎異鈔の聖人のお言葉をとおして仏心のまことに救われたのであ

る。

甲松君はのちに国木田独歩の『病床縁』を予に贈られた。その本の感銘の深い所に朱録をつけてあった。そこは、

「植村正久氏は、始めて余の心を開ける人なり。生死の境に迷える余の心は、氏の導きによって、初めて救われしと信じたり。氏は唯袴れと云う、袴れば一切の事解決すべしという。しかれども余は袴ること能わず、衷心に湧かざる祈祷は、主も容れ給わざらん。袴りの文句は極めて簡易なれども、袴りの心は難し得難し。誰か来りて、この袴り得ぬ心を救わずや。……。」

五月十九日、午后三時、独歩氏病床に泣く。

この一節の上に、甲松君が

「ここなり。予はここで珠数を切った。」と書いてあつた。

甲松君が珠数を寸断した時、福間氏も心身の苦痛に堪えられなかつた時であつたが、甲松君の所作を見て誤解し「彼は余を捨てたものである。否、余を邪魔者視し、厄介者視しているのである。貴様達はいよいよ余を見捨てた」と絶望して「こんな処には居らぬ」と病床を立とうとさ

日なり。此日は、余が仏陀の慈悲を感得したる、至孝の記念日にして、世に同恵の慈光に浴せらるる人の一人にても多からんことを期すればなり。」

とある。更に病中記の断片をひろえば、

「幸か不幸か、今回病床に臥して以来、恥かしながら始めて死なることを知り。今日の御高教にて、精神上光明の一端を知り得たのは貴師の賜なり」

「先般最も苦痛を覚えし時と、その程度はまさるとも劣らざる苦悶を今なめつつあるなり。ただ苦悶の状況が、外部に已前の如く現われざるは、如来の慈光の御蔭によって心意を慰すること大なればなり。」

「妙な時に仏恩が特に思い出されるものである。腫物を切断した頬の下半分の穴の中へは沢山ガーゼが入れてある。これを引き出す時、肉が附着しているから、生爪をはぐような痛みを忍ばねばならぬ。自分はその時、この世で云えば愛らしい子供の心のようになり、来世で云えば仏のようになって、唯称名ばかり口にするのである。それは、仏の保護があればこそ、苦痛もこれくらいですむのである。もし仏の保護を得ぬ世の病人であれば、必ずこれ以上の病状におちいって苦悶するであろうと思うと、その都度仏恩の有難さが胸にせまって、称名がまろび出るのである。」

れるので、看護の人々は驚いてすがりつき、手とり足とりして種々と慰めるといふ痛ましい有様となった。

氏はこの時、絶頂に達した病苦と煩悶とのために、自失することも、発狂することも出来なかつた。かくて氏は病床に仰臥しながら、医師も妻子も自分の身体もあてにならない。この世には何一つ頼りにすべきものはない!となった時、歎異鈔の末文、

「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのことみなもて、そらごとたわごとまことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします……。」

という一節が切実に味われ、その一刹那、フト、

「余は仏陀が余を助けたまうということ聞きしものにあらずや!」

という念が浮かび、覚えす念仏を称えられたのである。更に歎異鈔の第一章のころがしみじみと味われるようになり、仏陀の救済が疑いない事実となり、心中一点の苦悶も消え去り、病苦もしたがって軽減し、慚愧の心がおり一家は法義を喜ぶようになり、病床にはさしたる変りは無いが、家の内はおのずから法悦が溢れるようになった。

福間氏の手記に

「明治四十年十月二十四日は、余にとりて無二の感謝の

「手術台にのぼり、顔を白衣に包まれたる時、これよりわが身が如何になり行くべきかと思えば、実に惨然たるものなり。しかも仏の力により、余はやすらかなるを得るなり。」

「この不潔なる衣を着、この不浄なる煩惱界に居りながら、この安らかなる楽しい日夜を送り迎え居ることなれば、この衣を脱ぎ、この現在を後にせば、広き清き仏陀の世界に往生することは疑いなし。これ余が来世に対する信念なり」

「余が如来のお迎えにあずかるは、何日何時なるかは、人間の知り得る所にあらざれども、余は病苦のすすむにしたがい、仏恩の深きを知らざれば、感謝を述ぶる言葉なき次第なり。特にこの五尺の身体は、我身にして我物にあらず。全く仏陀よりのあずかり物なれば、一指たりとも粗末にすべきにあらず。たとい今夕お召しにあずかり、お迎えにあうとも、その瞬間までは、成るべく大切に、寸分たりとも御法にそむきてはならぬと心中に戒心しておる次第なり」





# 父と子に送る

釈 可 説 居 士

(註) 可説居士は昭和三十二年四月に処刑されましたが三十年に肉親にあてて書き残された、絶唱の文であります。海部郡立田村安泉寺の先住、野呂正音師から頂いていたものであります。慈光誌の百号の記念号に、法信鈔を頂いております。私も拘留所を二度訪ね、親しく語り合ったことも忘れ得ぬことであります。

## 父の拳骨

父親が恋しくなった。父親が恋しくなったと云っても、父親の顔も見なくなったが、私の恋しいのは、顔ではなくて拳骨が懐かしい。何故だろうか？ 私の生活には父親のように拳骨で頭を打つ人が居ないからだろう、又実際に居ないのです。

しかし、父に打たれていた頃は、父をうらみ、又父を嫌っていたが、今、人にも注意されず、自分の行為を笑って見ている人の中、自分の不注意なあやまちを望むような人の中に生活していると、昔の父の小言、拳骨が実に懐しいに護って下さるのだ。

だから他の人が私の行為や、悪行を知らぬからと言って誤間かしたい心になるのは、親の拳骨を忘れた時である。しかしそうした時でも御親様はかなしまれて、私をあわれんで、今まで以上に打ち砕いて、私の心を正道にむかわせて下さるのである。

唯、南無阿弥陀仏の御名を父の拳骨と思い、すこしのあやまちにも、すこしの不正にも、あの昔の父の拳骨を思い出して南無阿弥陀仏を称えて、父のありがたいなさげに感謝し、今までの不孝をおわびしている。

やがてみ仏様のお誓いのおかげで、浄土に生れて自由自在な御力を恵まれて、父や母や、兄や弟、そして妻子と仲よくお浄土に生れさせて頂いて、同じ久遠のみ親のいられる楽園に住ませて下さる日を待って、今はただ、報仏、謝恩の念仏を称えている。そしてみんなが共々にお念仏申してくれる日を願っているであります。

## 合掌の世界

合掌

この世界は合掌の世界である。

合掌の世界は悲しみも恐りも、欲も無いあかるい世界、

だからと云って、今さら父に頭を打てと言っても、あまりに父と私との間が離れ過ぎ、又社会がちがうからそれもできない。だからなおさら懐しく、恋しく思うのだ。何と云っても父に打たれ、怒られていたあの頃が楽しい時だった。しかしその頃はその楽しみに気づかず、私一人をおこり、打つと思って、父を嫌ったものだ。

父の拳骨の味は、普通の生活をしてはなかなか判らぬことであろう。幸に、私は今、一切の自由を離れて真の自由を求めて、父の拳骨にかわって、私を打ち励まし、正しい自己を求めて行くように導き、又道標となって下さる人、いや真実の法を求めの上に、そうした拳骨に逢いたいのである。ところが、不思議にも、永劫不変の親の拳骨をいただけることになったのである。その久遠の父の情というか、お導き下さる御手は、私のあやまちを、さき知られて、あやまちを行わない前に、心にしみる強い強い拳骨を打ちおろして下さるのである。

楽しい世界なのだ。

明るい楽しい世界は、合掌の世界、私の世界なのだ。

私の世界、私というこの世界は、南無阿弥陀仏の六字の世界なのだ。

南無阿弥陀仏の六字の世界は、巍々(ぎぎ)として輝ける光明の世界、合掌の世界、明るい楽しい私の世界でなければならぬ。

この世界を合掌の世界という、いや南無阿弥陀仏は浄土、浄仏、他力のみ手であり、み国であり、み仏の世界である。

合掌の世界は、喜びと報恩の世界である。喜びを見出しつかむことの出来ぬのは、拳(こぶし)の世界、怒りの世界である。しかしその世界にも南無阿弥陀仏は光を放って合掌の世界を知らし、そこに導き入れようとして居られるのだ。

合掌の世界は、仏の世界であり、報仏謝恩の念仏の世界である。だから念仏の世界には阿弥陀仏がましましてお導き下さるのである。

ふるさとの 親に分けたき この涙！

念 仏 詩 抄

念 佛の世にお念ふべきは念ふべき心なり  
念 佛の世にお念ふべきは念ふべき心なり

今のおきかせ

和上とおおせに

噴火山山にて

道草取りし身に

今のお聞かせとは——

和上ニ禿頭誠師

(以下同師。)

昨日も今日も

道草取り

久遠劫来

道草取り

今のお聞かせ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

あるわいの

木 村 無 相

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

こしらえた信心は

和上とおおせに

行はたとい名聞でも

つぶしがきくが

こしらえた信心は

犬のクソにもおとる

行は名聞でも自力でも

如来にお誓あり

定散自力の称名は

果遂の誓に帰してこそ

おしえざれども自然に

わが身はどうか——

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ち が う

和上とおおせに

わたしはこのように

聴聞しましたと言うのと

わたしはこのように

お知らせをこうむりましたと

言うのとは

ちがう——

聴聞しましたは

わたしのテガラ

お知らせをこうむりましたは

如来のオテガラ

わたしはお知らせ

こうむるばかり——

真如の門に転入する

こしらえた信心は

クソの役にもたたぬ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

三つのあやまり

和上とおおせに

呼びずめの親さまを

わすれているほどの

あやまりはない

死ぬることを

わすれているほどの

あやまりはない

念仏者が

念仏申さぬほどの

不似合(ふにあい)はない

わが身はどうか——

わが身はどうか——

ナムアマミダブツ  
ナムアマミダブツ

不仰(せ)こいつ  
和上おおせに

〃その罪助けてやるの  
勅命がかかってくださった

もうまもうちん  
仰せ一つ

仰せ一つ  
仰せ一つ

仰せ一つ

その罪助けてやる  
後生引き受けてやるの

仰せ一つ  
ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ  
ナムアマミダブツ

しあわせ

和上おおせに

〃今日

かく願う心になり  
聞く気になったのが  
はや久遠劫の御真実が  
とどいてくださった  
印(しるし)じゃ——

今 願う心になったのは  
今 聞く気になったのは  
如来御苦勞のたまものか  
願う心になりしあわせ  
聞く気になりしことの  
しあわせ——

ナムアマミダブツ  
ナムアマミダブツ

# 悲 歎 述 懐 和 讚

花 田 正 夫

親鸞聖人は八十三、浄土文類聚鈔、愚禿鈔、往生文類、  
等を選述され、聖人の御願いはすべて満足されて、安城の  
所謂御満悦の御影にも讃をせられたのである。

ところが八十四になられた時、御長男の善鸞さんを義絶  
せねばならない事件がおこり「悲しきことなり」と仰言っ  
ているが、こうした御悲歎の年も明けた初春、

弥陀の本願信すべし 本願信するひとはみな  
撰取不捨の利益にて 無上覚をばさとするなり  
との夢告和讃を得られたのである。ここに聖人は内なる

促しのままに正像末和讃の御製作となった。前の浄土、高  
僧の二和讃は晴れた空に富士の靈峰を仰ぐ趣きがあるのに  
くらべて、この和讃は五濁の悪世にあって、煩惱が怒涛の  
様に荒れ狂う中に、大悲救済の御手が縦横無尽にあらわれ  
ているのに刮目させられ深い感銘をうける。

さて悲歎述懐和讃は、正像末和讃の終りにあるもので、  
老聖人の胸にたぎる慚愧の御述懐である。聖人には善悪沙

次の裁きはなく、如来の前に己を糺(ただ)し、人を糺すと  
いう慚愧の御心の発露からである。

この和讃のはじめの五首が慚、あとの五首が愧である。  
これから順次拝誦しよう。

- 一、浄土真宗に帰すれども 真実の心はありがたし  
虚仮不実のわが身にて 清浄の心もさらになし
- 二、外儀のすがたはひとごとと賢善精進現ぜしむ  
貪瞋邪偽おおきゆえ 奸詐もはし身にみたり
- 三、悪性さらにやめがたしころは蛇蝎のごとくなり  
修善も雑毒なるゆえに虚仮の行とぞなすけたる

以上三首は、善導大師の観經の散善義を鏡とされて御自  
身の機相をありのままに表白されたのである。聖人は二十  
九の時、法然上人に導かれてたちどころに本願に帰し念仏  
者となられたが、八十五、六の御齡になられても、御自身  
微塵もよくなつたとは仰言らず、むしろ仏の心光の下に、  
虚仮不実、奸詐百端、雑毒虚仮のわが身であると、御自身

を打ち明けられての御述懐である。聖人は、高い所に居られて、ここまでおいでと呼ばれるのでなく、微塵も近づくことの出来ぬ、智目、行足のない私共に、御自身を打ち明けられて私共と同座して下さるのである。

(註) 外儀とは表面の姿である。ひとごとにとあるのは十人は十人ながらという意味にもなるが、私自身としては、どんな人の前でも自分をよく見て貰いたいの思いがとれぬ身と知らされている。こころは蛇蝎とあるが、私共が一寸善い事をして、そこに慢心の毒が含まれていてやがて人を害ね、自分も傷つく結果になる。しかも悪性やめがたしで、その煩惱のかたまりで、どうにも自分で始末がつかぬのである。

四、無慚無愧のこの身にて まことのこころはなけれども

弥陀の廻向の御名なれば功德は十方にみちたまう

(註) 月光が夜空に輝くのは、太陽の光りの返照であるように、本願を信じ御名を讃える身に育てられると、仏徳が自然にあたりにとどけられる。四国の庄松同行が「俺が喜ぶと人がそれを拾うて喜んでくれる」と云ったのはその趣きである。蓮如上人も「学生物知りの仏法を沙汰したることなし、一文不知の尼入道のあら尊や有難やと称うる念仏を聞いて人は信をとるなり」と仰言っている。

次に無慚無愧について、釈尊の教え通り、刀は刀自身を切れず、鏡は鏡自身を映し得ない様に、どんな智者も自分を知らぬことは出来ない。仏の真実な慈悲に浴して、はじめて慚愧の心もおこるのである。これは自分の部分的悪を見て苦しむ愚痴の後悔でなく、その暗さが無い。

七、五濁増のしるしには この世の道俗ことごとく

外儀は仏教のすがたにて 内心外道を掃敬せり

(註) 外道とは、仏教の諸行無常、諸法無我、涅槃寂靜の三原則にはずれた教のこと。当時の仏教者が形式だけ内が空洞化していることへのお歎きである。

八、悲しきかなや道俗の 良日吉日えらばしめ

天神地祇をあがめつつ 占祭祀つとめとす

(註) 昔イタリヤでガリレオがリレイが、地球は円い、天の星は七ツ以上であると発表した時、当時の宗教から大攻撃をうけた。日本では関ヶ原の戦いがあった、家康が突撃しようとした時、今日は西ぶさがりだから中止をと申したが、ぶさがっておれば自分が開けようと思つて、大勝利を得ている。こうした例を聞いて大いに気を大きくしたのであるが、現今、真宗で可成り熱心だと思ふ人々の間に、良日、吉日を苦にし、或は天の神、地の神に自

る。仏法は伝えるのでなく伝わるのである。

五、小慈小悲もなき身にて 有情利益はおもうまじ

如来の願船いまさずば 苦海をいかでかわたるべき

(註) 道綽禪師は安樂集に、兄弟二人と母が橋上を歩いていたところ、母があやまって川に落ちた。兄は早速飛びこんで母を助けようとしたが、頻死の母にしがみつかれて二人とも溺れて流された。弟は橋のたもとにあった舟をあやつつて来て母と兄を救ったと譬え、人間の力に限りがあるから、人間が人間を助け遂げることがむづかしい、早く沈まぬ船、本願の船を求めよ、と教えられている。

六、蛇蝎奸詐のころにて 自力修善はかなうまじ

如来の廻向をたのまでは無慚無愧にてはてぞせん

(註) 盤珪禪師は「血に汚れたものを血で洗ったのでは、始めの血はおちても新しい血で汚れる」と煩惱具足の身が煩惱の始末をつけようとしても不可能だと誠められ、ルーテルは「洗えば洗うほど汚れる手」と云っている。波岡氏は「限りなく濁れる水もきよめ注ぐ水絶えざればわれはやすけし」と、始末のつかぬ身に無窮の大悲を渴仰していられる。

分の幸福を祈願し、災をはらって貰うために参拝する人が見られる。これでは原始宗教の苦楽を本とした求福除災の域を出ていない。その上に何かむづかしい問題にあらうとらなったり、家相や人相や姓名判断をして貰つて、一つ迷いはじめると次から次と深入りして行く。聖人が善鸞さんを勘当までせられたのも、この迷い心を誠められたからである。

大経には「煩惱に眼を障えられて疑心暗鬼し、恐れ懼れる者に大安を与えよう」とあり、智度論には「仏法の中においては日に好悪なし」とある。撰取不捨の照護の下に、一切の業報を受けて越えさせて頂く時、無碍の白道が自然とひらけてくるのである。

九、僧ぞ法師という御名は とおときこととききしかど

提婆五邪の法にて いやしきものになすけたり

(註) 僧とは三人以上仲良く仏道を求めるものへの名、法師とは仏法を教える師匠のことである。提婆五邪の法とは形式だけきびしく説いて、中味が仏意にそむいた提婆達多の邪道をいう。所が形式仏教、伽藍仏教になって、提婆と等しい邪義に陥っていることを悲しまれたのである

十、外道梵士尼乾志に ころはかわらぬもととして

如来の法衣をつねにきて 一切鬼神をあがむめり  
(註)梵士とはバラモン僧、尼乾志とは露形で苦行をする  
ジャイナ教徒である。これも形ばかりの袈裟衣をつけ、  
内に種々なあやしげな神を祭って、煩惱を満足しようと  
していることへの悲しみである。

十一、悲しきかなやこのごろの和国の道俗みなともに

仏教の威儀をもととして 天地の鬼神を尊敬す

(註)当時の仏教の状態がいたましく眼に写ってくる。聖  
人の草稿ではこれで終わっているが、あと五首に、末法の  
世に僧を外からいやしめられると共に、仏法内でも高位  
の僧正等が使用人なみに平僧を扱っていることをきびし  
く悲歎していられるが、これは省かして貰う。

結 び

本願寺派ではこの述懐和讃を正信偈の勤行の時誦えない  
ので、一般信徒の間に知らない人が多い。そのためか、聖  
人が非常に悲歎された、日柄のよしあしや、家相や、姓名  
判断とか、現世の災をはらい、福を求める行事を平気で行  
っている人を見うける。正しい仏智、信心の智慧に恵まれ  
ないと、人生到るところに迷信が氾濫してくる。

私共が無事である時は、迷信などと笑っている人も、何  
か困ったことに遭うと、昔聞き覚えた迷信にとらえられ勝

法 信 抄

あらかわ そうべえ

ごしんじん

一九七七、一、一七日

じぶんでは どうにもならぬ 後生なり

すくいます みます ありとは

われまようともしらぬわれ すくいます

みほとけをきく おみのり とおと

わが名をば ひとこえにても となえなば

かならずすくうの おちかい とおと

みほとけを しんずるちからも なきみなり

まるごとたすけたもう とおとさ

えいえんのさとりとさちといのちをば

たもう みおやの ナムアミダブツ

ちである。私自身、母の老病で一進一退していた時、或旅  
先きで早朝鳥が鳴きさわぐのにあい、近親に不幸があると  
聞いていたことが思い出されて暗い心になった。その時念  
仏が浮かび、平素万物の靈長だと威張っている人間が、鳥  
の鳴き声でビクツクとはと知らされ、その恐れは消えた。  
幽霊の正体見たり枯尾花のたぐいであつた。

こうしたことがあつてからは、縁にふれると、色々な迷  
信の心もおこるが、そのまんま智慧の念仏の光明にまもら  
れて引きもどされることの有難さを知った。そして聖人の  
悲歎の涙が私のために流されているのをしみじみと仰がれ  
るのである。

迷信は感情からおこるから理屈では除かれないが、仏の  
正見の智慧から現われる慈悲の力によって跡形もなく解消  
されるのである。

兼好法師は徒然草の中で「山中の空家には狐狸が自由に  
出入りするが、老人でも主人が居れば人でさえ挨拶なしに  
は入れない」と譬え、仏を心のあるじとせよと勧めてい  
る。愛欲名利の渦巻く中に利害得失に走り廻っている街の  
生活には、種々様々の迷信が白風に横行しているにつけ、  
聖人の御悲歎を切に思い出される。

そおべえ 辞世

一九七七。八、一日

かがやきしせいしゆんのゆめ

ひとつきえ ひとつきえして

いつしよ おわる

希望きえ 挫折 失敗 くりかえし

後悔のふちに

いつしよおわる

やそじかけ むなしくすぎて

うたかたの きえなんなこそ

かなしかりけれ

おつきあい しばしねがいし 下級従者 うまのあし

はなみちならで ひきさがるなり

(註)

荒川惣兵衛さんは、生涯の御仕事として、外来  
語辞典(角川書店出版)を著わされ、絶讃され  
て居る方です。

# あとがき

今日、八月十五日、敗戦の思出も生々しい。国破れて山河ありというが焼土と化した市街に立って、衣食住を求めてさ迷うて、歌も笑いも消えた中で、仏心のまこと一つに支えられて、走り廻った日を憶う。時流れて三十余年、外形は立派に復興したが、内心の空洞化、主の居らない大きな家、そこには孤狸が横行している。一人一人が心の主を持つ日を願ってやまない。

本月号も、生活に即しての仏法を中心に先生方の原稿を頂いた。近角先生の信仰談話録。福島先生の三願の転入。菅瀬芳英師の福岡家の不幸の中に美事に咲いた信心の華。更に、死刑囚の家族にあてた遺書、等々、當日頃私の心中にあつて心のもとしびとなつて下さっているものばかりであります。

木村さんは前号に続いて、滋賀県の源道寺御老院の禿頭法師の仰せを、讃仰、信味されたものを紹介した。親鸞聖人が御晩年まで、ときぎでせうろう、と仰せられせうろう、というように、よき人法然聖人のお言葉をくりかえされている。それは単なる真似事ではなく、師弟一味、師の仰せがそ

のまま御自身の言葉となりきつている妙消息である。唯可信斯高僧説で結ばれた正信偈に、弥陀、釈迦、七祖と一味にとけた聖人の真面目がある。

聖人の述懐和讃は、御自身の懺悔と共に、当時の仏教への御悲歎の切々たるものであるが、顧みれば現在の宗教界も聖人の当時と何等の变りのないことを思うにつけ、悲しい限りである。ここに聖人の御心の御一端を誌して共に聖人の御心に帰らせて頂きたいものである。

「己上、これは愚禿がかなしみなげきにして述懐としたり、この世の本寺、本山のいみじき僧ともうすも、法師ともうすもうきことなり」との聖語の前に襟を正さしめられるものがある。

八月は休み、九月の涼風を待つて、例会もさせて頂き、二度と来ない人の世の時を聞法の縁とさせて頂きたいものである。本年に入つて、鬼頭夫人、佐々木鶴二医師、早瀬静子さん、横井保広氏、三輪与一氏、稲垣かねさん、興善寺老夫人、松本こうざん等々、次々に浄土に還えられ、謹んでお悔みとお礼を申上げる次第である。

## △御案内▽

○一道会例会。毎月、第一、二、三日曜  
午后一時半。南区駈上町二の八八、  
一道会館  
市バス、新郊通り一丁目下車、地下鉄。  
新端橋終点下車。

○教西寺法話会。毎月二十四日、午前午後  
昭和区小椋町二丁目四番地。  
市バス、北山町、又は御器所通り下車。  
地下鉄、北山下車。

定価 半年 七〇〇円 (送共)  
一年 一四〇〇円 (送共)

名古屋市南区駈上町二ノ八八  
編集・発行人 花田 正夫

電話八二一局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷

印刷人 坂部 光雄

名古屋市南区駈上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座 名古屋 一〇四七〇番

郵便番号 四五七